慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | 北島建孝氏蔵『すみよし本地』翻刻 |
| Sub Title | |
| Author | 宋, 春暁(Sō, Shungyō) |
| Publisher | 慶應義塾大学国文学研究室 |
| Publication year | 2022 |
| Jtitle | 三田國文 No.67 (2022. 12) ,p.143- 148 |
| JaLC DOI | 10.14991/002.20221200-0143 |
| Abstract | |
| Notes | 図削除 |
| Genre | Departmental Bulletin Paper |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20221200-0143 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 北島建孝氏蔵『すみよし本地』翻刻

宋　春曉

本書は、従来、島根県某家蔵本として知られていた『すみよし本地』である。『住吉の本地』とは、『住吉縁起』とも呼ばれる、室町末期から近世初期の成立とされる寺社縁起物である。現存諸本は、三系統に分類され、第一系統には慶應本、東大本、フランス本、第二系統には島根県某家蔵本とされてきた北島建孝氏蔵本、第三系統には國學院大本、大阪歴博本が現存する。その内容は、以下の様々な住吉明神の霊験が語られる。[1]

第一系統

1天神七代、彦火々出見尊釣針探し等。
2仲哀天皇の熊襲侵攻
3神功皇后の三韓侵攻
4草薙剣盗難事件
5能《白楽天》説話
6三種神器の盗難事件
7蒙古襲来

第二系統

1牛まど説話
2神功皇后三韓侵攻
3李道王の兵法伝授

第三系統

1仲哀天皇熊襲侵攻
2神功皇后三韓侵攻
3能《白楽天》説話
4蒙古襲来
5藤原純友の乱
6源平合戦
7後白河院の灌頂

三系統のうち、第二系統の現存諸本は、これ一冊のみである。主に、牛まど説話、神功皇后の三韓侵攻、李道王の兵法伝授等、他系統と異なる内容が記される。また、北島氏によれば、昭和五五（一九八〇）年に「自重館文庫」として整理され、数十の大箱に分類されていたが、本書が納められている大箱の所在が不明になったという。本稿は、その影印をもって翻刻したことを断っておく。書誌は以下の通りである。

・形態　横型奈良絵本　一冊。
・時代　〔一七世紀後半頃か〕。
・題簽　すみよし本地。
・料紙　不明。
・寸法　縦一五・五糎、横一四糎。
・丁数　二六丁。
・挿絵　計五図。

翻刻に際して、本文は底本のおもかげを残すように努めたが、漢字・異体字はおおむね現行書体に改めたほか、私に句点・読点・「　」括弧等を記し、改行も加えて読解の便宜をはかった。

【付記】
本書の翻刻の御許可を賜った北島建孝氏に深く感謝申し上げ

る。なお、本稿は、潮田記念基金による慶應義塾博士課程学生研究支援プログラム補助金による研究成果の一部である。

【翻刻】

それ、わかてうは神明の御めくみ、和光どうぢんのけちえん、人として、たれか、これをしんせざらん。りしやう、いつれもをろかならす、とは申せとも、中にも、すみよし大明神のえんきをは、うけたまはるに、まことにまことに、ありかたき御事なり。むかし、じんくう皇宮の御代にあたつて、かうらいこくより、三かんをもよほして、わかてうをかたふけんかために、すまんそ（1オ）うのひやうせんにて、すてに、つくしのはかたのおきまて、をしきたるときに、くわうぐう、我朝を、三かんのために、うはゝれん事を、かなしみ給ひて、すせんぞうのひやうせんを、もよほして、いこくのゑひすにむかはせ給ふ。

そのとき、武内左大臣木氏の宿ねを左将軍として、はつかうし給。さ大臣は、諸将のめいを（1ウ）つかさとり、さいかいの波上に、おもむかせ給ふ。されは、わかてうの神〳〵、てんせう大神をはしめとして、雲にぜうし、かすみにかくれて、后の御舟をは、しゆこし給ふとそ、みえにける。

こゝに、すみよしの大みやう神は、ほんち天照太神と御一躰として、さうかいをつかさとり（2オ）、九州日向のくに、たちはなおどの浦に、すませ給ふか、かうらいこくより、わかてうを、ほろほさんかために、多せいおそひきたる。しかれは、后宮、むかはせ給ふ御事を、しろしめして（2ウ）

**［挿絵・第一図：住吉明神と神功皇后］**（3オ）

思しけるは、すてに、先帝、どくの矢にあたらせ給ひしかは、日ほんのいくさは、やふれにけり。このたひも、くわうくうの御ちからにて、このゑひすをは、しりぞけたまはん事、おほつかなく、おほしめしけるにや。御ちからをそへさせ給はんかために、日向のくに、おどのうらより、一人のらうおうと（3ウ）げんしさせ給ひて、一ようのふねにとりのり、かいしやうに、うかひいてたまふときに、くわうくうの御ふね、すてに、びせんのおきにつかせ給ふ。みやうじん、まぢかく、こぎよせ給へは、后宮えいらんありて、「あれは、いかなるおきなそ」と、御たつねある。

らうおう、こたへていはく、「我は（4オ）、このおきにて、つりをたるゝおきななり。しかるに、いこくのゑひす、このにつほんを、かたふけんかために、たせい、すてに、きうしうまて、みたれいりぬ。されは、三かんをしりぞけて、まいらせんかために、后宮、はつかうします。我、なみのうへをてうれんしつれは、なに事にても、ちよくめいをかうふりて、ちからをつけたてまつらん」と、のたま

［第一図］

ふ（4ウ）。くわうくう、えいかん、なゝめならす、とはいへとも、「もし、いこくのえひす、はかり事のために、かやうにらうおうとげんして、御舟にちかつきける事もや」と、御うたかひおはしまして、さらに、御こゝろをゆるし給はす。御神、ことわりに思しけるか、「なに事にても、あれかし、ちうせつをつくして、えいらんに（5オ）そなへ、二こゝろなきむねをは、しらしめはや」と、思しめしけるところに、やゝしはらくありて、さうかいのそこ、どうようして、へきらう雲をうがち、すせんそうのふねとも、とうさいに、たゝよふところに、なみのそこよりも、十四丈にあまりける牛のつのは、八かくにおいわかれたるか、かけいてゝ、きささ（5ウ）の御ふねを、くつかへさんとする。后宮、はしめたてまつりて、「いかゝせん」と思しける所に、らうおう、み給ひて、「いさゝかも、さはき給ふへからす」とて、海上へとひをり、さしもおひたゝしき十丈あまりのうしを、両角をとつて、ねちかへし、大かいのそこへおしこみ給ふ（6オ）。

**［挿絵・第二図：住吉明神が牛の角をつかまえる］**（6ウ）

それより、この所、一つの島となる。牛辻島（うしまと）となづけたり。きささ、大きにえいかん有て、かゝるちうせつ、たくひなくそ思しめしにける。そのゝち、后宮、仰られけるは、「このたひ、いくさの左将軍は、たけのうちの大臣、右しやうくんは、このおきなに給はるのあいた、事よろしく相はからふへき」とのせんしなり。其とき、おきな、せんしをかうふり給（7オ）へは、そうし申されけるは、「こんとのいくさに、三かんをほろほさんと思しめし候はゝ、りうくう城のてうはうに干珠満珠（かんしゅまんしゅ）とて、二つの玉の候をからせ給はゝ、弓箭にをよはす、そくしに、えひすをほろほし、天下は、をだやかになり給ふへし」と、仰られけれは、后宮、「いかんとしてか、りうくうのたからをはかるへきそ」と（7ウ）あやしみ給ふ。おきなのいはく、「こゝに、あんどのいそらとかうして、りうくうのつかひをじゆうにつかまつるものあり。かのいそらをめして、仰つけられ候へ」と、そうし給へは、「いかにとして、そのいそらをめすへき」と、の給ふほとに、らうおう、のたまひけるは、「このものは、常（8オ）に、ぶがくをこのみ候へは、いそき、きがくをは、そうし給へ」と、仰られける。「それこそ、やすき事なり」とて、れうらんきんしうにて、ふねをかさり、やかて、ぶがくをそうせられける。あんのことく、いそらは、おもてにふくめんをたれて、なみの上に（8ウ）うかひいて、このがくをそ、ちやうもんしたりける。おきな、の給ひけるは、「なにとて、なんちは、おもてにふくめんをたれて、まかりいつるそ」と、のたまへは、いとはつかしけにて、うちそばみゐたり。らうおう、の給ひけるは、「后宮、仰らるへきむねある也（9オ）、ふくめんをとり

［第二図］

て、御まへちかくまいるへき」よしをそ、のたまひにける。いそらかいはく、「我らは、なみのそこにぢうして、藻くつにまとわれ、身には、かきみそを引うけ候へは、かたち見くるしくて、なか〳〵、御目にかゝるへき（9ウ）ふせいならす」とそ、はぢらひける。おきなは、きこしめして、「それは、いさゝかも、くるしからす。なんちを、一天のあるし、たのみ思しめさるゝには、りうくうじやうのたからに、かんじゅ、まんしゅとて、二つの玉あり。このたまをかりて、（10オ）えさせよ、とのちよくちやうなり。いそき、とゝのへて、ちうせつにそなへよ」と、の給へは、いそら、うけ給はつて、「これはいかゝと、そんすれとも、おきなの仰、おもけれは、いかてか、いなみたてまつるへき」とて、それより、かいていへそ入に（10ウ）ける。くわうくう、御らんして、いとふしきなるものにそ、思しめされける。

さるほとに、いそらは、なみのそこへつつと入て、りうくうに、まいりて、ことのよしをそ、つけたりける。りうわうは、これをきゝ（11オ）て、「さうかいのあるしの御所望といひ、国王のせんしなれは、いかてか、いなみたてまつらん」とて、すなはち、ふたつのほうしゅを、いそらにこそ、わたされける。ほとなく、かいしやうに、うかひいてゝ、おきなに（11ウ）たてまつりける。みやう神は、よろこひ給ひて、后宮にこれをさゝけ給ふ（12オ）。

**［挿絵・第三図：覆面のいそらと住吉明神］**（12ウ）

后宮、大きにえいかんありて、「このたひのいくさに、この人なくては、いかてか、その利をうくへき」と、あさからぬ事にそ、おほしめしける。さるほとに、いこくのつわものともは、したひ〳〵に、せめきたりて、ちくせん、ちくこのくに、（13オ）、せめいりけり。

さて、こうくうの御ふねは、夜を日につきて、いそくほとに、せんぢんは、すてに、ちくせんのちにもつきにけり。いこくのくんせいは、これをみて、「すは、日ほんの大将軍、むかふなり」とて、てつぐわんをはき（13）かけ、ゆみ、てつはうを、あめのことくに、いかくるほとに、てんち、めいどうし、ぎやくらうは、雲をうかち、ときのこゑ、矢さけひのをとは、たゝ、せかいも、くつるゝはかりにそ、見えたりける（14オ）。されとも、右将軍は、すこしも、さはき給はす、てきのかたへ、きりをふらし、くろき雲をたなびけて、たゝ、ぢやうやのやみとなし給ふ。みかたの舟は、はくじつに、かゝやくはかりに、みえわたりける（14ウ）。

［第三図］

さるほとに、右将軍は、かのまんしゅをとつて、てきのかたへなけ給へは、一時かあひたに、まん〳〵とあるさうかい、いつくともなく、ひきてゆくほとに、あとは、たゝ、へい〳〵となる。すなはまにそ（15オ）なりにける。いこくのぐんせい

は、これをみて、「すてに、はや、じちいきほろふへき時節、たうらいしけるにや。りう神、ぢしんも、手をあはせて、大かいをは、ほしきり、ひらちとなすこそ、めてたけれ（15ウ）」と、いさみけるか、すまんそうをは、なみのそこへ、ゆりすゑけれは、「いさ、おり立て、うちとらん」とて、けんげきを手てに引さけて、うんかのことく、いさみかゝる。右将軍、見給ひて、又、まんしゅを（16オ）、なけたまへは、四はう八めんより、うしほ、山のことくに、みちきたりて、三かんのぐんせいとも、ひとりものこらす、そこのみくつとそ成にけり。

后宮、よろこひ給ひて、「このついゑに（16ウ）のつて、すくに、かうらいこくへ、おしわたりて、せむへき」よしを、せんしあるほとに、おきな、「しかるへし」とのたまひて、つしまのおきへそ、すゝみ給ふ。「これより、かうらいこくへは、一わたりにてほとちかし」といへとも、（17オ）おりふし、風のよこをふきて、たやすく舟のとをるへきやうなかりけれは、うしやうくん、のたまひけるは、「こゝは、おきなか住所として、かせのこゝろをよくしるなり」と仰られて、やかて（17ウ）、小舟にうちのらせ給ひて、おきを、はるかに、まねき給ひ、りうわうに、「風やむへき」よし、仰られけれは、すなはち、くろ雲、しりぞき、かせも、はや、やみにけり。くんせいは、よろこひて、われも／／と、おし（18オ）わたりけり。それよりして、このわたりを、住吉せとゝはなつけたり。

さるほとに、后宮は、さまたけなく、かういきにいらせたまふ。「かうらいこくのつわ物とも、いくさには、うちまけて、そくはく、ほろほさるゝ（18ウ）のみならす、あまつさへ、わかくにへ、みたれいりぬは」、とて、まうせいをそつして、かけむかひけり。右将軍は、御らんして、すなはち、せんちんありて、きめう、ふしきを、あらはし給ひて、そくはくのくんせいを、ほろほし給ふ（19オ）ほとに、かうらいこくのみかとは、やかて、かうさんしたまひける（19ウ）。

**［挿絵・第四図：高麗国の帝が神功皇后に降参する］**（20オ）

につほんのやつこになるへきちきりをそ、なしにける。ときに、后宮、うしやうくんにせんしありけるは、「もろこしには、いくさの法ありて、かたきをやふり、利をうけ、こくどをたやかなる（20ウ）法ありときく。ねかはくは、わかくにへ、これをつたへん」と、ちよくありけれは、右将軍は、うけ給はり給ひて、やかて、みなみのかたなる山のなかはに、うちのそみたまひけるに、一人のらうおう、こつせんと（21オ）きたる。

**［第四図］**

右将軍のいわく、「なんち、なにものそ」と、のたまへは、「我は、つねには、しんたんこくにある李道王（とうわう）と云せんにんなり。われ、三かいを一時にかけつて、いたらぬくにもなし。御身は、じちいきの（21ウ）しゅごしんとして、こんと、三かんのために、と

かいして、こと〳〵く、てきをしたかへ給ふ。ゆゝしくこそはおほゆれ」と、申せは、右将軍は、きこしめして、「我くにのあるし、しんたんこくに、天帝よりも、つたはれるいてきを治する（22オ）法書ありと、きゝたまふ。そのしよを、わかくにへ、つたへん事を、のそみ給ふ。いそき、そののそみをたつしてんや」と、おほせられけれは、せんおう、うけたまはりて、「いかゝあるへきとおもへとも（22ウ）、おきなの仰、おもけれは、ちからおよはす、まかりなん」とて、空をさして、とひ行けるか、三ときはかりありて、一くわんをあたふる。右将軍、よろこひ給ひて、ひそかに、えいらんありてのち、「このしよを、ぼんけのともからに、あつかふならは、おそれある（23オ）へし」と、の仰にて、やかて、はいとそなし給ふといへり。

さるほとに、いくさ、さんして、后宮、わかてうへつきて、そのゝち、右将軍は、后宮にむかはせ給ひて、「我は、すなはち、日向のくに、おどのうらに、住する神なり。わかくにのしゆこ神たるうへ、このたひいてゝ、三かんをたいちせり。このゝちは、ゆくすゑはるかに（23ウ）、わかくにを、いよ〳〵まもるへし」と、の給ひて、そのゝち、「我、住吉の神とけんして、さうかいをつかさとるへし。けふよりは、あまねく、衆生にりやくせん」と仰られて、けすることくに、うせ給ふ。后宮、まことに、ありかたく思しめして、「この神のちからならすは、このたひのいくさに、いかてか、そのりを（24オ）うくへき。さらは、いはゐたてまつれ」とて、せんしうさかいのみきはに、住吉大みやう神といはゝせ給ふ（24ウ）。

**［挿絵・第五図：住吉社への参拝］**（25オ）

御やしろの正めんは、いこくのかたへ、なしたてまつる。されは、いくさ神なれは、とて、かす〳〵のまつしやたちをは、ぎよりんくわくよくに、いはゐたてまつる。これ、すなはち、いくさのそなへを、かたとれる也（25ウ）。なみのうへ、舟のうち、風波のなんにあはん人は、このすみよしを、しんしたてまつるにおゐては、御りしやう、かうふること、うたかひなし。有かたかりける事とも也。我みても、ひさしくなりぬ、住吉のきしのひめまつ、いくよへぬらん。（26オ）

**［第五図］**

（1）『住吉の本地』の詳細については、二〇二二年六月二六日の説話文学会大会において、「『住吉の本地』における能《白楽天》説話―國學院大學蔵本の特徴と意義を中心に―」と題して報告し、二〇二三年度に『説話文学研究』第五八号に論文化される予定である。

（そう・しゅんぎょう）